

# これからの時代の キャリア教育の課題

秋田県立大学 総合科学教育研究センター  
准教授

渡部昌平

## 1 キャリア理論の歴史の変遷

これまでのキャリア理論の歴史の変遷を振り返ることで、これからの時代のキャリア教育について考えてみたいと思います。

まず産業革命の進展に伴い、19世紀末から20世紀初頭にかけて「職業指導運動」が起きます。地方から都市に人口が流入し、人と職業のマッチングを行う必要が出てきたからです。その後、発達の観点が導入され、職業選択は一時点でなされるのではなく幼少期から連なる一連の選択・決定からなるものであること、就職した後も成長や変化が続くこと、適職選択だけでなく家庭や余暇とのバランスも必要であることが明確化されます。

さらに、発達段階は人により時代に

より異なることが指摘されます。常に安定した社会ではなく、常に昇進・昇給できるとは限りません。倒産・廃業もあるでしょうし、離転職や結婚・出産・育児・病気・ケガ・介護などもあります。社会や個人が常に変化する中で、偶然性の活用、転機や変化への柔軟な対応が求められます。働きがいや生きがいなど「本人にとって働く・生きる意味」も重要です。

こうした中で1990年代から台頭してきたのがナラティブ／社会構成主義アプローチです。本人の働く意味・生きる意味を明確にするために「成功体験」や「尊敬する人」「小さい頃の記憶」「好きな雑誌やテレビ番組」などを質問して、本人がどんな分野でどんな仕事をしたいのか、どんな生き方をしたいのかを具体的に語ってもらう技法

です。

このように、キャリア理論はこれまで対象期間を「入職時まで→入職後まで→全生涯」と拡張し、対象内容を「職務関連→職業生活→生活全体」へと拡張してきました。クライエントを観察対象としてカウンセラーが診断・分析するスタイルから、クライエント自身が主体的に自らの主観（仕事観・人生観）を語ることを支援するスタイルへと変化してきました。クライエント自身が主体的に関与するからこそ、職業人生の選択・決定でも前向きになれます。

2000年代以降になると、こうしたナラティブ技法に加えて「ブレインストーミング（マインドマッピング）してみる」「小さく試してみる」「行動しながら考える」「チームを組む」など

の行動支援（フォローアップ）を行う実践家が増えてきています。

## 2 間接体験をする、好きな役割（仕事観）を言葉にする

日本でも1990年代後半から中学・高校あるいは大学生向けの職場体験（インターンシップ）が増加してきました。小中高大では企業見学や街探検（商店街探索）、ジョブシャドウイング、社会人による職業講話、OB・OG訪問なども盛んに行われていることと思います。第1次産業・第2次産業が中心の「働いている人が作った物が誰からも見える」時代と異なり、サービス産業化が進んだ現代では誰がどんな仕事をしてどんな成果を挙げているかが見えにくい時代です。見学する・話を聞く・体験することによって間接体験をしないと、仕事に対するイメージが湧きにくくなっています。

例えば中学校のキャリア教育推進のポイントを見ると、中学校では「生きる力の育成」が求められています。「自らの役割や将来の生き方・働き方等を考えさせ、目標を立てて計画的に取り組む態度を育成し、進路の選択・決定に導く」とこととされています。しかし現実はどうでしょう？ 将来を考えないまま「自分の成績の範囲で一番偏差値の高い普通高校に行く」「自分の成績の範囲で一番偏差値の高い大学等（あるいは名の通つていそうな、経済的に許されそうな大学等）に行く」

ことを目指す若者も少なくないように思います。特に近年は保護者も子どもも保守化して、地元進学が増えているとも聞きます。必ずしも将来とリンクして選んでいるわけではなさそうです（実際に「専攻の選択と、就職する分野は別」と言う生徒もいますし、一方でやりたい学問ではないのに「就職に有利だと聞いたから」と学部・学科を選択する生徒もいます）。

またキャリア教育推進のポイントでは、次のようにも指摘します。「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである」とするならば、中高では職場体験（インターシップ）に限らず・クラスや委員会・部活などでの役割体験を通じて、「自分が好きな役割・得意な役割」を意識させる・授業やクラス活動・課外活動等を通じて、自身の価値観（仕事観・人生観）を明確に言語化する支援をする・進路選択の前に職場体験（インターシップ）だけでなく業界・企業研究や社会人インタビューなどを行わせて、十分な間接体験を積ませる・進路選択においては常に「その先」（高校の先・大学等の先）を意識した進路選択を行わせる、すなわち将来の働き方・生き方を意識した選択を行わせる

ことが重要ではないかと考えています。

す。

また選択・決定するためには、そうした価値観を明確にするような役割体験が必要です。例えば好きなこと・興味があることがあり、そうした好きなこと・興味があることを体験して自分に適性や能力がある程度あることが自覚できなければ、自信を持って選択・決定はできないでしょう。すなわち学校生活を通じてあらためて「いろいろな役割体験」を積ませてあげる必要があるのです。家と学校の往復で、家でも学校でも何もしていなければ、選択・決定はできません。部活や委員会に限らずとも、クラスでの役割分担、あるいは家事手伝いでも趣味でも何でも構いませんが「何か好きなこと・楽しいこと・得意なこと・興味のあること」を見つけ、それが将来の仕事につながるのか考える機会を提供することが求められます。そして将来の仕事につながるための知識や経験・スキルを、学校生活の内外を通じて少しずつ積み上げていくことが求められるのです。少しづつ知識や経験・スキルを積ませてあげる支援が重要となるのです。

### 3 課題と提言

私はキャリアアカウンセリングの中でもナラティブ／社会構成主義アプローチを専門としています。これは「人は、それぞれの環境・文化・人間関係のもとで『感情や評価を伴う経験』を蓄積して、自分自身を形作る」という考え

方です。過去の経験の意味づけによって自分自身（の仕事観・人生観・自己観）が構成されており、これからの経験の意味づけによってそれらは変化していきます。自信を持って選択・決定できる生徒・学生を育てるためには、経験を積ませる中で「自分はこれだ」と思えるものを見つけていく必要があります。特定の学科あるいは分野だけ成績が良い（あるいは好きな）生徒・学生は比較的選択が簡単かもしれませんが、全般的に成績が良くない生徒・学生だけでなく全般的に成績が良い生徒・学生も選択には迷いが生じるかもしれません。そうすると選択は「どの選択をする」と自分にとって「幸せな仕事」「幸せな人生」とはどういう状態か、どういう役割を与えられてどういう成果が出せた時か、を考えさせる必要があります。成果を出すためには、その分野での知識や経験・スキルを積んでいく必要があります。

学級担任一人では、クラス全員の仕事観・人生観を把握するところまではできるかもしれませんが、その先の行動支援、すなわち高校・大学等あるいは業界・企業研究までを全て一緒にやっていくことは難しいと思います。その辺りは本人だけでなく他の教員や地域人材、保護者も巻き込みながら進めていく必要があります。

すなわち「これからの時代のキャリア教育の課題」をまとめるとするならば、

ば、一部繰り返しになります。

- ・キャリア教育は職場体験（インターシップ）の実施で仕事や責任感について大まかに学べば済むというのではなく、正課の授業・課外活動全体を含めた生徒・学生の役割体験の連なりから個々の仕事観・人生観を言葉で明確にすることを支援するものであること

- ・一時点での就職がゴールではなく、一生涯の生活全体を設計・計画していくものであること（そしてそれは途中で変わっていくこと）を意識させること

- ・生徒・学生の仕事観・人生観に合った人生が送れるよう、必要な知識・経験・スキルの蓄積を支援するものであること（＝生きる力の育成）

- ・「何らかの職業（人生）選択ができればいい」のではなく、そこで「良く生きる」すなわち役割意識と責任感を持って集団（社会）に受け入れられる必要がある、そのためにも集団での生活（人間関係）を学ぶ必要があること

- ・それは学級担任一人では達成できるものではなく（生徒・学生一人では達成できるものでもなく）、他の教職員や地域、保護者も巻き込んで内外の資源を活用して行うものであることを意識する必要があるというふうに考えています。